

今日はII列王記1章から「悔い改めの招き」と題して3つの点でみことばを取り次ぎます。

1. 主に逆らう道1-4

II列王記はアハブの子アハズヤから始まります。アハズヤについてはI列王記22章の最後に短くまとめてありましたが、II列王記1章ではもう少し詳しく記しています。また今日のII列王記1章はエリヤの最後の働きです。来週見る2章ではエリヤはエリシャを後継者とし、天に昇っていきます。エリヤは最後まで主に忠実に働きました。

1-4【1 アハブの死後、モアブがイスラエルに背いた。2 アハズヤは、サマリアにあった彼の屋上の部屋の欄干から落ちて重体に陥った。彼は使者たちを遣わし、「行って、エクロンの神、バアル・ゼブブに、私のこの病が治るかどうか伺いを立てよ」と命じた。3 そのころ、主の使いがティシュベ人エリヤに告げた。「さあ、上って行って、サマリアの王の使者たちに会い、彼らにこう言え。『あなたがたがエクロンの神、バアル・ゼブブに伺いを立てに行くのは、イスラエルに神がいないためか。4 それゆえ、主はこう言われる。あなたは上ったその寝台から降りることはない。あなたは必ず死ぬ。』」そこでエリヤは出て行った。】

それまでイスラエルが支配していたモアブが、アハブの死後イスラエルに背きました。権力が交代する時にこのようなことが起こりやすいのです。モアブについては3章で詳しく記されています。アハブに代わって王となったアハズヤは足かけ2年の短期間しか治めませんでした。ある時彼は王宮の部屋の欄干から落ちて重体に陥りました。その時彼は、エクロンの神バアル・ゼブブに自分の病が治るかどうか伺うために、使者たちを遣わしました。エクロンはガザ地方の町の一つです。バアル信仰は多神教なので、それぞれの地方にバアルにちなむ地方の神がいました。バアル・ゼブブはエクロンのバアルです。バアル・ゼブブはアハズヤのお気に入りの神だったのでしょう。

その頃、主の使いがエリヤに告げました。「さあ、上って行って、サマリアの王の使者たちに会い、彼らにこう言え。『あなたがたがエクロンの神、バアル・ゼブブに伺いを立てに行くのは、イスラエルに神がいないためか。4 それゆえ、主はこう言われる。あなたは上ったその寝台から降りることはない。あなたは必ず死ぬ。』」そこでエリヤは出て行きました。アハズヤが使者たちを偶像の神のもとに遣わす行為は、イスラエルに神がいないことを表すことでした。アハズヤの主なる神に対する不信仰の結果、神は彼を癒さず、必ず死ぬとのさばきを宣告されたのです。

5-8【5 使者たちがアハズヤのもとに戻って来たので、彼は「なぜおまえたちは帰って来たのか」と彼らに尋ねた。6 彼らは答えた。「ある人が私たちに会いに上って来て言いました。『自分たちを遣わした王のところに帰って、彼にこう告げなさい。主はこう言われる。あなたが人を遣わして、エクロンの神、バアル・ゼブブに伺いを立てるのは、イスラエルに神がいないためか。それゆえ、あなたは上ったその寝台から降りることはない。あなたは必ず死ぬ。』」7 アハズヤは彼らに尋ねた。「おまえたちに会いに上って来て、そんなことを告げたのはどんな男か。」8 彼らが「毛衣を着て、腰に革の帯を締めた人でした」と答えると、アハズヤは「それはティシュベ人エリヤだ」と言った。】

エリヤは王の使者たちに会いに行き、主のことばを伝えました。そこで使者たちはエクロンに行かず、王のもとに戻ってきました。アハズヤは彼らが早く帰ってきたので、理由を聞きました。すると使者たちは、ある人が私たちに会いに来て、「バアル・ゼブブに伺いを立てて、イスラエルに神がいないとするアハズヤは必ず死ぬ」という王に対する主のことばを告げたので帰って来ましたと伝えました。王は「その人はどんな男か」と聞くと、彼らは「毛衣を着て、腰に革の帯を締めた人でした」と答えました。アハズヤは「それはティシュベ人エリヤだ」と即座に言いました。彼は主の預言者エリヤのことを知っていたのです。エリヤはアハズヤの父と母と対決した預言者でした。カルメル山でのバアルの預言者とエリヤの対決の出来事も聞いていたことでしょう。それでもアハズヤは主なる神を信じませんでした。

先週見たI列王記22:52-53にはアハズヤについてこうあります。【52 彼は主の目に悪であることを行い、彼の父の道と彼の母の道、それに、イスラエルに罪を犯させた、ネバテの子ヤロブアムの道に歩んだ。53 彼はバアルに仕え、それを拝み、彼の父が行ったのと全く同じように行って、イスラエルの神、主の怒りを引き起こした。】アハズヤは、父アハブと母イゼベルの道に歩み、バアル礼拝を続けました。さらにイスラエルの最初の王ヤロブアムの道に従い、金の子牛を拝みました。イスラエルは多神教となってしまいました。しかし、本来イスラエルは主なる神によってエジプトから贖い出された神の民です。しかし、一旦主なる神に背を向け偶像礼拝をすると、その悪の習慣を次の世代が受け継いでいったのが、北イスラエル王国の歴史です。

第1の点で覚えたいことは、罪の継続ということです。慣性の法則というのがあります。止まっている物に力を加えなければ止まったままとなり、動いている物に力を加えなければ動き続けるという法則です。ある牧師は、日本人の宗教は慣性の法則のようで、先祖伝来の宗教が子々孫々にまで止まることなく続いていると言いました。普段特別な信仰を持っていない人も、神社仏閣では当たり前のように拝み、仏式の葬儀を行います。イスラエルの状況も同じでした。ヤロブアムから始まった偶像礼拝は、アハブ、イゼベルで加速し、アハズヤへと続きました。ではこの動きを止める力とは何なのでしょう。それが今日のテーマである悔い改めです。悔い改めとは信仰の方向転換です。悔い改めという力が加わる時、偶像の神からまことの神への信仰に変わることができるのです。今日の箇所はアハズヤに対する神のさばきの宣告であると同時に、神の悔い改めの招きでもあるのです。そのことを続けて見ていきましょう。

2. 信仰と不信仰 9-14

9-12【9 そこでアハズヤは、五十人隊の長を、その部下五十人とともにエリヤのところに遣わした。隊長がエリヤのところに上って行くと、そのとき、エリヤは山の頂に座っていた。隊長はエリヤに言った。「神の人よ、王のお告げです。下り

て来てください。」10 エリヤはその五十人隊の長に答えて言った。「私が神の人であるなら、天から火が下って来て、あなたとあなたの部下五十人を焼き尽くすだろう。」すると、天から火が下って来て、彼とその部下五十人を焼き尽くした。11 王はまた、もう一人の五十人隊の長を、その部下五十人とともにエリヤのところに遣わした。隊長はエリヤに言った。「神の人よ、王がこう言われます。急いで下りて来てください。」12 エリヤは彼らに答えた。「私が神の人であるなら、天から火が下って来て、あなたとあなたの部下五十人を焼き尽くすだろう。」すると、天から神の火が下って来て、彼とその部下五十人を焼き尽くした。】

アハズヤは 50 人隊の長と兵士 50 人をエリヤのもとに遣わしました。それはエリヤを捕らえて王のもとに連れて来るためです。最初に遣わされた隊長は山の頂に座るエリヤに対して言いました。「神の人よ、王のお告げです。下りて来てください。」「下りて来てください」は丁寧な訳ですが、原語は命令形なので、「下りて来なさい」という感じです。それに対してエリヤは「私が神の人であるなら、天から火が下って来て、あなたとあなたの部下五十人を焼き尽くすだろう」と答えました。エリヤが「私が神の人であるなら」と言うのは、隊長はエリヤを神の人と呼びながら、実際はエリヤを神の人とは信じていないということです。また「天から火が下って来て」の「下って来て」は原語では先ほどの「下りて来る」と同じ言葉です。ですから、「私が本当に神の人なら、私が下りて来る代わりに天から火が下りて来て、あなたがたを焼き尽くす」と言ったのです。そしてそのとおり、天から火が下りて来て、彼らを焼き尽くしました。

アハズヤはそのことを知り、2 番目の部隊を派遣します。2 番目の隊長は、1 番目の隊長よりさらに厳しく「急いで下りて来なさい」と言います。彼もエリヤに「神の人よ」と呼びかけますが、実際には信じていませんでした。その結果、1 番目の部隊と同じように、エリヤが下りて来る代わりに天から火が下りて来て、彼らを焼き尽くしました。これはカルメル山で天から火が下り、献げ物を焼き尽くしたのと同じ奇跡です。旧約聖書のさばきは直接的であり、即座に行われます。

13-14【13 王はまた、第三の五十人隊の長と、その部下五十人を遣わした。この三人目の五十人隊の長は上って行き、エリヤの前にひざまずき、懇願して言った。「神の人よ、どうか私のいのちと、このあなたのしもべ五十人のいのちをお助けください。14 ご承知のように、天から火が下って来て、先の二人の五十人隊の長とそれぞれの部下五十人を、焼き尽くしてしまいました。今、私のいのちをお助けください。】

次に 3 番目の部隊がエリヤに遣わされます。隊長は同じようにエリヤに「神の人よ」と呼びかけました。しかし、今回は本当にエリヤを「神の人」と信じて呼びかけたのです。なぜなら、彼は先の二つの部隊が天から下る火によって焼き尽くされたことを知っていたからです。そしてエリヤの前にひざまずき、私たちのいのちを助けてくださいと懇願しました。その結果、3 番目の部隊のいのちは助かりました。

第 2 の点で覚えないことは、信仰と不信仰についてです。3 人の隊長は同じようにエリヤを「神の人」と呼びましたが、先の二人はエリヤを神の人とは信じませんでした。エリヤを神の人と信じないとは、エリヤの神、主を信じないということです。それに対して 3 番目の隊長はエリヤを神の人と信じ、エリヤの神を信じました。同じ呼びかけをし、同じようにエリヤに会っても一方は不信仰になり神のさばきを受けました。しかし、もう一方は信仰を持ち、いのちが助かりました。

このことは同じ福音を聞いても、ある人は信じ、ある人は信じないことによっても表されます。イエスを救い主と信じた人は永遠のいのちを受け、信じない者は永遠の滅びに至ります。イエスはトマスに「信じない者ではなく、信じる者になりなさい」と言われましたが、私たちにも同じように「信じない者ではなく、信じる者になりなさい」言っておられます。ですから、イエスを信じない者にならないで、信じる者になりましょう。

3. 悔い改めの招き

15-18【15 主の使いがエリヤに「彼と一緒に下って行け。彼を恐れてはならない」と言ったので、エリヤは立って、彼と一緒に王のところに下って行き、16 王に言った。「主はこう言われる。『あなたが使者たちをエクロンの神、バアル・ゼブブに伺いを立てに遣わしたのは、イスラエルにみことばを伺う神がいないためか。それゆえ、あなたは上ったその寝台から降りることはない。あなたは必ず死ぬ。』」17 王は、エリヤが告げた主のことばのとおり死んだ。そしてヨラムが代わって王となった。それはユダの王ヨシャファテの子ヨラムの第二年のことであつた。アハズヤには息子がいなかったからである。18 アハズヤが行ったその他の事柄、それは『イスラエルの王の歴代誌』に確かに記されている。】

エリヤは主の使いのことばに従い、3 番目の隊長と一緒にアハブのところにきました。そして「バアル・ゼブブに使者たちを遣わすのはイスラエルに神がいないからか。それゆえあなたは必ず死ぬ」との主のことばを告げました。聖書は「王は、エリヤが告げた主のことばのとおり死んだ」と記しています。それは、アハズヤはエリヤの言葉を聞いても、主の前に悔い改めることをせず、イスラエルの神、主を信じなかったということです。

第 3 の点で覚えないことは、悔い改めの招きに次いでです。もしアハズヤがエリヤの前に「私は愚かなことをして罪を犯しました。今自分の罪を悔い改め、バアルではなくイスラエルの神、主を信じます。どうか私のいのちをお助け下さい」と言って神の前に心から悔い改めたら、アハズヤに対する神の答えは変わっていたのではないのでしょうか。神のさばきの宣告は、裏を返せば悔い改めの招きでもあるのです。新約聖書の最初に、バプテスマのヨハネが、エリヤと同じ服装で現れ、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」と言って、人々に悔い改めを迫りました。イエスも宣教第一声で、「時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と伝えました。悔い改めは、信仰の方向転換です。今まで慣性の法則のように、先祖代々受け継いでいた宗教を悔い改めによって止めるのです。そして、自分の意志でイエスを救い主と信じる決断をするのです。神はその人を豊かに祝福し、永遠のいのちの救いを与えてくださいます。